

リアルな現場と人の中で人と野生動物の相互作用の理解に挑む

Understanding human-wildlife interactions: engaging with people and wildlife in the real world

内田 健太（東京大学）

Kenta Uchida (The University of Tokyo)

人工知能（AI）をはじめとした科学技術の目覚ましい発展は、私たちの研究スタイルを大きく変え始めている。AI とまでは言わなくとも、自動撮影カメラやバイオリギングなどの観測機器の進歩や、データサイエンス分野の台頭は、今後の哺乳類学の発展に多大な貢献を果たすだろう。実際、こうした技術を駆使すれば、研究者一人でもインパクトのある成果をあげられる時代が来ている。そのような時代にあって、私はあえて泥臭いフィールドワークと古典的な野外観察を主軸に、分野横断的なチームを作って、人と野生動物の相互作用の理解とその応用に挑む研究を行っている。その根底には、自分の経験から得られる人間（研究者も含めた）と野生動物のリアルな情報に、すごく心躍るからという理由があるのかもしれない。そして、そのリアルな体験の中に、研究を通じて人と野生動物の関わりを深く理解し、それを実社会の問題解決に活かすヒントがあると考えている。

私は、幼いころから人間と野生動物の相互作用に興味があり、両者の関わりの最前線地域ともいえる都市や自然観光地と、そこに生息する哺乳類をモデルに研究をしてきた。こうした環境では、人と野生動物の相互作用を高い解像度で観察できるため、確実な実証研究や新しい概念の発見につなげやすい。実際、対象種であるエゾリスやキバラマーモットは、目の前で様々な人間との相互作用を見せてくれ、観察が非常に面白い！一方で、人との距離が近いゆえに、市民と研究者の摩擦が生じやすく、都市生態学者の悩みの種でもある。私の研究チームでは、地道な対話やアウトリーチ活動を通じて、市民との良好な関係を築くことに多くの時間を割いてきた。そこには、科学コミュニケーションなど地域社会を意識する研究の過程自体が、社会実装につながると考えているからである。

また、私は、生態学・生理学・動物認知学・寄生虫学・都市計画の研究者と協働して、分野横断的な研究を進めている。近年、技術進歩に伴う研究分野の細分化・専門化が、学問分野の分断を生み、社会課題の解決を一層困難にしている。特に、生物多様性保全に関する課題には、分野横断的な視点が不可欠である。私の研究チームでは、学生も含む多様な研究者が協働することで、多角的な視点から、人と野生動物の相互作用に関する研究・教育の両面において、成果を上げること目指している。

私の研究内容や業績の整理は、生成 AI に任せられる時代である。だからこそ、本受賞講演では、一連の研究の背景にある、リアルなエピソードなどを通じて、フィールドワークの魅力や人と協働することのワクワク感を伝えたい。体験の機会が減り、人の繋がりが希薄になる時代に研究に身を投じる若い世代（自分も若手ではあるが）にとって、現場の面白さや、人と関わりながら研究をする楽しさが伝わることで、哺乳類研究がさらに盛り上がる一助となれば幸いである。